

## 五代友厚とモンブラン伯爵～パリ万博への出展計画を中心に～ 「鹿児島の近現代」教育研究センター 客員研究員 吉満 庄司

### はじめに

令和5年10月29日にかごしま県民交流センターで開催された「鹿児島の近現代」教育研究センター設立1周年記念シンポジウム「五代友厚と鹿児島〈鹿児島の近現代〉」において、渋沢栄一史料館の井上潤顧問が「近代日本社会の創始者渋沢栄一の思想と行動」という演題で基調講演をされた。井上氏は渋沢栄一の功績や思想について紹介され、渋沢栄一と五代友厚は「東の渋沢、西の五代」と称されることもあるが、二人の直接的な接点はほとんどないこと、渋沢は五代のことを批判的に評価していることについて触れられ、「この後のシンポジウムで、その謎が解明されることを期待しています。」と講演を締めくくられた。しかし、シンポジウムにおいてそのことについて全く触れられることはなかった。

そこで、小稿では「なぜ渋沢栄一は五代友厚のことを批判的に捉えていたか」ということについて検証したい。

### パリ万博における渋沢栄一と五代友厚

渋沢栄一は旧幕臣で、五代友厚は倒幕勢力の中心となった旧薩摩藩士である。では、渋沢は旧薩摩藩士に対して全て批判的かということそうではない。例えば、幕末京都において西郷隆盛から豚飯をご馳走になったことなどを日記に記しており、懇意にしていたことが分かる。

では、なぜ五代友厚だけを批判的に捉えていたかということ、慶応2（1867）年にフランスで開催されたパリ万博において、薩摩藩に煮え湯を飲まされたことが極めて大きな要因であると思われる。渋沢は、将軍徳川慶喜の名代として派遣された徳川昭武の随員として、御勘定格陸軍附調役（会計係兼書記）という肩書きで参加し、一行の滞在中の経費削減に努め、博覧会出品物の売却等も行うなど手腕を発揮した。しかし、既に先乗りしていた薩摩藩は「薩摩琉球国勲章」に象徴されるような幕府と対等な独立国として振る舞い、幕府の権威は失墜し、当初予定していたフランスからの借款計画も白紙に戻された。

五代友厚自身はパリ万博には参加しておらず、フランスで直接渋沢らとやりあった訳ではない。しかし、薩摩藩がこのパリ万博に出展することを決めたのは、前年にフランス貴族モンブラン伯爵と契約を結んだ五代友厚であった。薩摩藩のパリ万博の使節団の団長は家老の岩下方平であるが、万博の準備は五代と契約を結んだモンブランが着々と進めていたのである。それゆえ、渋沢の悔しさの矛先は五代へと向けられたものと思われる。

### 五代友厚とモンブラン伯爵との交渉

慶応元（1865）年、薩摩藩は正使の新納久脩を団長とし、五代友厚、寺島宗則、そして通訳の堀孝之の4人に、町田久成が統括する14人の留学生を加えた総勢19人の使節団をイギリスに派遣した。いわゆる「薩摩藩英国留学生」である。薩摩藩の欧米への留学生派遣計画は島津斉彬が計画しており、実際に琉球に滞在中のフランス人に蒸気船の購入と合わせて留学生派遣の交渉を行っていたが、斉彬の急逝により計画は白紙に戻された。その後、薩英戦争を経て、五代が具体的なプランを立てて実行に至った。

イギリス到着後、五代は新納と堀の3人で、マンチェスターをはじめとするイギリス各地の工業地帯を回り、武器弾薬の購入に奔走した。さらに、紡績機械の購入と技師の派遣要

請を行い、その紡績機械をもとに慶応3（1867）年に集成館のあった磯地区に鹿児島紡績工場が創設され、我が国最初の近代機械紡績がスタートした。

一行がロンドン滞在中、フランス貴族のモンブラン伯爵が接触を図ってきた。なお、モンブランはベルギーにも領土と城を持っており、ベルギーにおいては男爵の爵位を持っていた。モンブランは日本への関心が高く、文久年間には来日を果たし、日本語や日本の文化について学びフランスの地理学会で日本に関する報告を行ったり、『日本事情』を著すなど日本通として知られていた。当初は幕府との接触を図り、元治元（1864）年と慶応元（1865）年の遣欧使節団に接触を試みたが全く相手にされなかった。そうした中、薩摩藩の使節団一行がイギリスに来ているという情報を得て接触を図ってきた。これに対し、五代らは興味を示し、モンブランの招待でベルギー・フランスへ渡った。

イギリスからドーバー海峡を渡りベルギーのオスタンド港に到着した五代、新納、堀の3人を出迎えたモンブランは、ベルギー南西部（フランスとの国境近く）にある居城インゲルムンスター城に招いて歓待した。同城は現存しているが、個人での維持管理は困難ということで地元のビール会社に売却されている。五代の記した「廻国日記」には、敷地内の杜に狩猟に連れて行ってもらったという記述もあり、当時は城の一带は広大な森で狩猟場になっていたことが窺えるが、現在は城の周囲だけが公園として残り、その他は一般の住宅地となっている。



インゲルムンスター城（ベルギー）

五代らは、モンブランに連れられ首都ブリュッセルに赴き、ベルギー政府当局者の立ち会いのもと、「ベルギー商社」設立契約に関する協議を行った。その内容は、モンブランがベルギーを代表し、薩摩藩と合同で会社を作り、薩摩藩内の鉱山資源を開発し、製造機械や武器を作る。生糸や茶の増産を図りヨーロッパとの貿易を促進する。利益は双方の出



新納・五代・堀らの写真（モンブラン家蔵）

資額により配分する。薩摩藩が軍艦や大砲を購入するときは同社を通して注文することなどが定められていた。「ベルギー商社」の設立は、まさに五代の持論である外国貿易を基調とする富国強兵策を具現化したものであった。同社の設立については、五代らが仮契約を済ませ帰国した後、藩内でも肯定的な意見が多く実現に向けて進むかと思われたが、親英政策をとる薩摩藩の方針に合わず、結局設立には至らなかった。

五代らがモンブランとの間で取り交わしたもう一つの重要な案件が、翌年フランスで開催されるパリ万博への出展である。モンブランから、万博とは国家の威厳を示す一大イベントであり、当時の日本の状況を踏まえたとき、薩摩藩の存在を世界にアピールする絶好のチャンスであることを教示された。そして巨大な見本市として、薩摩藩が今後ヨーロッパと貿易を展開することになった時、特産品を売り込む絶好のチャンスであるとアドバイスされた。実際、このとき出展した薩摩焼は、その後ヨーロッパで大人気となり大量に輸

出されることとなった。

### パリ万博における薩摩藩と幕府

慶応3（1867）年の第2回パリ万博は、ナポレオン3世の第2帝政の最盛期に行われ、世界中から900万人の観衆を集めた。会場はパリの中心部を流れるセヌ川河畔のシャン・ド・マルス（練兵所）が充てられ、広大な敷地の中央に間口370メートル、奥行482メートル、面積14,600平方メートルの巨大な楕円形をした主会場（産業館）が建設された。周囲には異国情緒を醸し出す個性豊かな諸国のパビリオンが幾棟も作られた。なお、この場所に万博のシンボルとしてエッフェル塔が建てられるのは、明治22（1889）年の第3回パリ万博の時である。

フランスの駐日公使レオン・ロッシュから出展要請を受けた幕府は、当初乗り気ではなかった。しかし、すでに薩摩藩が独自に出展するという情報が入ると、將軍名代の徳川明部大輔昭武（15代將軍慶喜の弟）を全権に、外国奉行でフランス駐劄大使に任じられた向山一履以下24名からなる使節団を派遣し、約4万7200両の費用を使って集めた日本の特産品を出品し、日本とその文化を紹介した。

薩摩藩は、薩摩焼や薩摩切子といった薩摩の産物に加え、泡盛や砂糖といった琉球の産物等を出品した。使節団のメンバーは、使節兼博覧会御用として家老の岩下方平、側役格として市来政清、博覧会担当として野村盛秀、渋谷彦助、岩下方美（清之丞）、蓑田新平、これに通訳の堀孝之、大工の鳥丸啓助、モンブランの秘書の斎藤健次郎、留学のため同行した岩下方平の長男の岩下長十郎の10名で、その他にイギリス人ハリソンとホームが同行した。なお、通訳の堀は途中香港までで、フランスには渡っていない。

『鹿児島県史』には、「随員には野村盛秀、渋谷彦助、岩下清之丞、蓑田新平、白川健次郎、堀孝之、大工鳥丸啓助、英人ハリソン、同ホーム、留学生岩下方美（方平の男、長十郎）が加わり」とあり、岩下清之丞と方美を別人として扱い、方美と長十郎を同一人物と誤認しているので、訂正しておきたい。なお、方美は方平の親戚で、方平よりも年配なので、使節団を率いた若き家老岩下方平にとって方美の存在は心強かったことであろう。

幕府の使節団よりも2か月以上早くフランスに到着した一行は、さっそくモンブランを薩摩藩の代理人として正式に博覧会の委員長に任命し、綿密な打合せを行った。まず、博覧会総裁宛に「薩摩侯は日本の大諸侯たると同時に兼ねて琉球国王でもある。薩摩侯としては幕府の下にあるも琉球国と王としては幕府から独立した君主である」との書面を提出し、薩摩藩の地位をアピールした。黎明館が所蔵する「玉里島津家資料」の中に、岩下方平がパリから国元の家老小松帯刀に万博の準備の進み具合を報告した書簡が存在するが、その便箋は特注で「AMBASSADE de S.M.le Roi des Liou Kiou」（琉球国王陛下の外交使節団）というレターヘッドが印刷されている。この特注の便箋使用もモンブランのアドバイスと推測され、管見の限りではこの1通のみだが、おそらく相当な数が印刷され公的な機関宛ての書簡もこれが使われたものと思われる。

薩摩藩は、幕府とは別に万博にエントリーし、会場内に独自の陳列場（パビリオン）を確保し、丸に十字の島津家の家紋を掲げた。さらに、開会式にも琉球王国の使節として式典に参列した。幕府をないがしろにしたこの行為は、国体にもかかる重大事件として幕府使節団としても黙認できず、日本出品取扱委員長のジャン・レセップス立ち会いのもと談判に臨んだ。幕府側は、支配組頭の田辺太一と通訳山内文次郎が出席し、薩摩側は岩下方平、市来政清とモンブランの3人が出席した。田辺は、薩摩の掲額に日本という文字がない

こと、出品目録に「琉球国王陛下松平修理太夫源茂久」とあること、開会式に薩摩の代表が琉球国王の使節名義で参列したことなどを詰問した。岩下は、「自分は何も知らない。万事、モンブランが一手に引き受けてしたことで、当方はあずかり知らぬこと」とかわした。双方の激しいやりとりの結果、幕府の出品物は「Gouvernement du Taikoun」（大君政府）とし、薩摩側は「Gouvernement du Taischiou du Satsouma」（薩摩太守政府）という表記にすることとし、双方とも日の丸の下に記すことで決着をみた。しかし、翌日の新聞各社は「日本はプロシアのような連邦制をとっており、大君（将軍）はその中の有力な一王侯に過ぎず、薩摩太守などと同じように独立した領主である。したがって、大君といえども大名と同格ではないか」という論調の記事を一斉に掲載し、幕府の威厳は著しく失墜した。田辺はこの件で責任を取らされ本国に召還され、向山も公使の職を解かれることとなった。

この情報を新聞各社に流したのは他ならぬモンブランであった。その他にも、幕府が出品した「武者人形」や芸者が日本茶などを提供して人気を博した「日本茶屋」が新聞で紹介された際には、いずれも丸に十字の大きなエンブレムが置かれているが、これもモンブランによるマスコミ戦略であった。また、「日本は万世一系の天皇を君主として、将軍は諸大名と等しく天皇から官職を授かっているに過ぎない」といった日本の国情を解説した自著『日本事情』を、万博会期中に関係者に頒布してプロパガンダに努めた。

さらに、薩摩藩は万博会期中に「薩摩琉球国勲章」という日本最初の勲章を作成し、フランスの高官や各国の代表に贈り、あたかも薩摩藩は幕府から独立した国家であるかのような印象を与えた。これは、当時「勲章」というという概念のない日本人の発想ではなく、モンブランの発案によるものだった。そもそも、勲章を制定して功績のある者に贈るという行為は、国家であって初めて可能となるものである。すなわち、薩摩藩が日本連邦の中できちんと主権を持った独立国であることを、目に見える形で立証したことになる。



薩摩琉球国勲章（尚古集成館蔵）

この時期、幕府はフランスとの提携を深め、横須賀製鉄所の建設費や軍制改革にかかる費用600万ドルの借款をフランスに依頼していた。しかし、パリ万博における薩摩藩の外交戦略によって、将軍が日本における唯一の主権者、幕府が日

本における正統政府であるという前提が崩れたため、借款契約は白紙に戻され。薩摩藩と幕府のパリを舞台とした攻防は、単に外交面にとどまらず、経済面でも幕府に大きな衝撃を与え、国内の政局にも大きな影響を与えることとなったのである。

パリ万博における薩摩藩のやり方を目の当たりにした幕府の使節団は憤慨し、特に会計担当の渋沢栄一はやるせない怒りを覚えたことだろう。具体的な戦略はモンブランの発案で進められたが、パリ万博で薩摩藩が何をアピールするかという大きな枠組みは、すでに前年に五代友厚との間で取り交わされていたのである。

渋沢はパリ万博で味わった屈辱がトラウマとなり、それを画策した五代に対する批判的な姿勢をその後も引きずっていったと思われる。明治になって両者が様々な場面で接触があればそうした感情が氷解する可能性もあったろうが、それぞれの活躍の場が東京と大阪と分かれていたことや、五代が若くして亡くなったことによりそれも叶わなかった。